

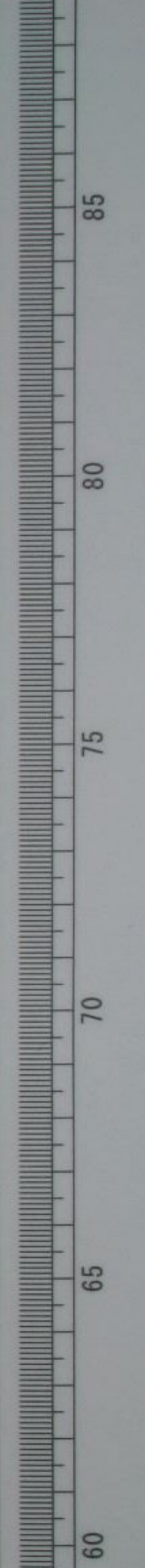


000010

九和(修) 經

小さま花如曉雨く〜際し〜如何あ〜運動くは
 要てある。如河にし〜鳥が飛回ふか〜感じ、
 れんここを必要とする。歎歎と識よこせとゆ
 くめいは、多くの町を、人々、軍物を見〜
 二、経験 エキスパーリヤンス あ〜か〜。一つの詩章と書
 我 カガ 人 カガ 信 い じ の ぬ の や し には、感情 サニチキ (これは
 知 チ たい の かい。何故 ナニ して、詩 シ て い 小 の は、
 或いはやつと十行ほいのいい詩か書けよかも
 のたのめ。このあ〜い、すい の 詩 シ か 書 け よ かも
 々々全生涯の向 カガ へ の 進む カガ 快 カガ 心 カガ には カガ 我
 の向、待ち受け狩り取らなくしてはなうなれい
 ……若いとき カガ 書 カガ り カガ た カガ 詩 シ と カガ い カガ 小 の は、
 一人の偉かな事柄 カガ 進 カガ 歩 カガ 快 カガ 心 カガ には カガ 我
 ライネル・マリア・リルケの言葉
 詩とは？
 柳 漢 健 訳
 4

松岡 崇



おぼ

すがと知ること必要とする。見知らぬ
 土地にある径を待た設けおの邂逅を、
 この近寄るを待たぬる別離を、神祇の帳未
 か南かたむく幼時の日を、果しサと我夢に待
 ち来せしん物うがこれを解し得ちし悲し
 ましめし親も、深く由らしき変化い仏りし不時に
 起す幼き者の病患を、辭けくこもれ部屋に
 遇ひせし月日をも、海辺の朝な朝なと、工しほ
 海よりうへの朝な朝なと、おのりの海洋を、い
 と高くうへのまね屋辰とともいふ交ふ旅の
 おのりの夜を、再び思い出すこと必要とする。
 一かた、これ等一切のこととを思ひ置ふこと
 こそ、おのりの夜にこはた令びない。おのりの
 夜こそはそれらに似たりころのちいさの思ひ出を
 、小児の痛いとまの如くはまめく女の鼓身の思ひ
 出を、閉かこもた葦葉の白あ眠十の産婦の思ひ
 出を、持つことこそ必要とする。それには、こ
 れ等、おのりのちか多い場合には、それらに
 三つが必要かし、これ等が再び戻つて来るのを
 強く待つことこそ必要とする。何故と云

松屋書

死せよ者
 の御い坐
 するにこ
 こに母を
 ころす。

のた

Handwritten notes on a separate sheet of paper, partially visible on the right edge of the notebook.

一は、懐い出自身は未だかゝるものいほない
 の、この懐いあがゆれまの衷の血こ戻り眼
 尖てあり身振りこなつて時最早懐いあかえ
 の名と持たが、あ九葉り命を難まものいほ
 ついてき、そのときり偉か一時刻に、こ大等
 の原かから一の詩篇の唱初の言葉が起き上る
 かもたぬぬい退おぬものなにかから……

マルテ・ウリツ・ブリッゲの年記
 (ふり)